『丹後国（たんごのくに）独立！?』

～遺跡が語る古代の丹後～

【基調講演】　律令国家のなかの丹後国

京都府立大学　教　授　菱田哲郎　Ｐ１～Ｐ８

【報 告 １】　丹後国府を探る　～宮津市府中地区の遺跡～

宮津市教育委員会　主　任　河森一浩　Ｐ９～Ｐ 16

【報 告 ２】　丹後の先進技術　～塩・鉄・織物～

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

企画調整係長　筒井崇史　Ｐ 17 ～Ｐ 24

【質疑応答・意見交換】

コーディネーター：

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査課長　小池　寛

日 時：平成 29 年 6 月 10 日（土）　午後 1 時 30 分～ 4 時 30 分

場 所：ふるさとミュージアム丹後（京都府立丹後郷土資料館）研修室

主 催：京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

共 催：宮津市教育委員会

京埋セミナー資料 No.135 － 414

律令国家のなかの丹後国

京都府立大学
教　授　菱田　哲郎

１．はじめに

丹後国は、丹波国から分国して和銅（わどう）６年（713）４月に成立しました。もともとタニハの地であったにもかかわらず、丹「後」にされてしまったのは残念な結果ですが、それでも律令制の中で重要な地域として役割をはたしてきました。ここでは、遺跡の調査成果もふまえながら、古代丹後国の特徴について見ていきたいと思います。

２．奈良時代の交通制度と役所・寺院

そもそも、丹後国は山陰道に属します。山陰道の最初の国が丹波国でしたので、都に近い側が「ミチノクチ」、都から遠い丹後側が「ミチノシリ」となり、都を中心とする世界観の中では「丹後」とされたのはやむを得ないことでした。山陰道は、行政区画の単位であるとともに文字どおり官道（かんどう）を示しています。すなわち山陰道諸国を山陰道が貫くのですが、丹後国はあとから付け加わったこともあり、支路が到達していたと考えられています。奈良時代の山陰道は、鳥取県内で調査によって発見されていますが、大規模な直線道路であったことがわかります。京都府内では八幡市の内里八丁（うちさとはっちょう）遺跡で一部が発見されています。この支路の終着点が丹後国府（こくふ）でした。おそらく府中地区にあったと考えられ、今日にいたるまで検討が進められてきています。官道には、国々を貫く駅路（えきろ）のほかに、国内の郡家（ぐうけ）をつなぐ伝路（でんろ）がありました。丹後国内の加佐（かさ）、与謝（よさ）、丹波（たには）、竹野（たかの）、熊野（くまの）の５郡の役所（郡家）をつなぐ道が想定できます。ただし、郡家の場所は、いずれもよくわかっておらず、遺跡の発掘調査で奈良時代の掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）が見つかっているところが、その候補として注目されてきました。郡の中心域には仏教寺院が建てられることも多く、となりの丹波国では天田郡の和久寺廃寺（わくでらはいじ）、何鹿郡の綾中廃寺（あやなか）のように、郡家周辺に寺院が立地しています。丹後では、分国までに建立された寺院として、河守（こうもり）廃寺（加佐郡）、中野（なかの）廃寺（与謝郡）、俵野（たわらの）廃寺（竹野郡）のほか、久美浜町佐野にも古代寺院があったと想定されています。分布からは各郡に１ヶ寺程度あり、それぞれの地域の中心を考える材料になります。これらはいずれも交通の要衝にありますので、古代丹後国の伝路を復原する手がかりになります。

３．奈良時代の生産と流通

丹後国からは、米をはじめさまざまなものが都に貢納されていました。平城宮・京から出土する木簡の多くは、それら物資に荷札として付けられていたので、物流の様子を生々しく知ることができます。米以外では、水産物が目につき、魚や海藻が知られていますが、鮭の記述もあり、当時、野田川を鮭が遡上していた可能性も考えられます。天皇、貴族の食卓を支える重要な地域であったことがうかがえます。また、造酒司から出土した木簡は酒造り用の米、すなわち酒米の産地が知られますが、丹後の白米・赤米が用いられています。このような貢納品は国府でとりまとめる必要があり、そのためにも丹後分国が必要であったのかもしれません。一般に、志摩、能登、隠岐など小国は海産物の貢納が盛んですので、手早く都に送る必要のある海産物の集散のためにも、分国して小さな国であることが便利であったと考えます。

丹後では、このような海産物の獲得に長けた人々が暮らしていました。籠神社が所蔵する海部氏系図に代表される海部がもっとも有名で、丹後地域の古墳も海部氏との関係で議論されてきました。これとは別に注目されるのが石部です。石部は磯部と同じく「イソベ」と読み、磯での生産活動を生業とする人々を指します。平城京出土木簡では丹後国丹波郡 大野郷に石部がいたことがわかります。この地域にある大田鼻横穴墓からは「厨人」と墨書された土師器が出土しており、石部の活動を示している可能性があります。ちなみに横穴墓が遅くまで残る地域として知られる隠岐国においても海部とともに磯部が海産物の貢納に関わっていたことが知られています。丹後の石部の場合は米の貢納なので、隠岐国の 事例と同じというわけにはいきませんが、今後も注目すべき点と考えています。

このほか、丹後国では鉄や須恵器といった工業も盛んでした。そして、舞鶴市浦入遺跡のように大規模な製塩をおこなった遺跡も明らかになっています。９世紀頃に盛期がありますが、奈良時代にも活発な塩生産をおこなっていました。平城宮・京に貢進された塩の産地もまた木簡から明らかになりますが、そこでは若狭国が圧倒的なシェアを占める一方で、丹後国は皆無です。浦入遺跡では、「笠百私印」と押印された製塩土器支脚や「与杜」と記す墨書土器があり、丹後国の関わりで塩が生産されたことは間違いありませんが、そこから都に貢進されていないことに疑問が残ります。若狭国での交易といったことも視野に入れて考える必要があります。

４.日本海の海上交通と丹後国

丹後国の地理的な特徴として、日本海に面していることが挙げられます。早くから海上交通による物資の移動が盛んでしたし、三坂神社墳墓群や左坂墳墓群といった旧大宮町域

に弥生時代の豊かな副葬品をもつ墓が営まれるのも、この地域が海上交通とつながり、かつ丹後半島を回避する内陸ルートの存在が考えられます。このことは、対外交易にも関係しており、古墳時代のヤマト王権が朝鮮半島とのルートを確保するために丹後を重視したとする意見が有力になっています。 また、奈良時代では、渤海使(ぼっかいし)が日本海側の諸国に到達することが史料から明らかになっており、丹後にも渤海滅亡後の東丹国の使節が上陸しています。９世紀になって国際関係が緊張すると、日本海側は新羅(しらぎ)に備える防衛ラインとしての役割も担いました。このようなこともまた、丹後国を分置しておく理由の一つになったと考えられます。この点については、旧網野町の横枕(よこまくら)遺跡が東丹使の迎賓施設ではないかという説が出されており、高級な食器が多く出土することが、その可能性を示唆しています。丹後府中は中世になると交易の湊として活性化し、中国からの商人もやってきています。日本海に面するがゆえ、常に国際関係と深くかかわって丹後国が存在していたことがわかります。江戸時代の北前船が日本海の海上交通を象徴していますが、その原型ははるか古代にさかのぼり、丹後の重要性を決定づけてきたと言えます。

【史料】

『続日本紀(しょくにほんぎ)』和銅六年四月乙未(三日)条

割二丹波国加佐、与佐、丹波、竹野、熊野五郡一、始置二丹後国一。

【参考文献】

伊野近富「丹後の迎賓館」(『京都府埋蔵文化財論集』第６集　京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2010

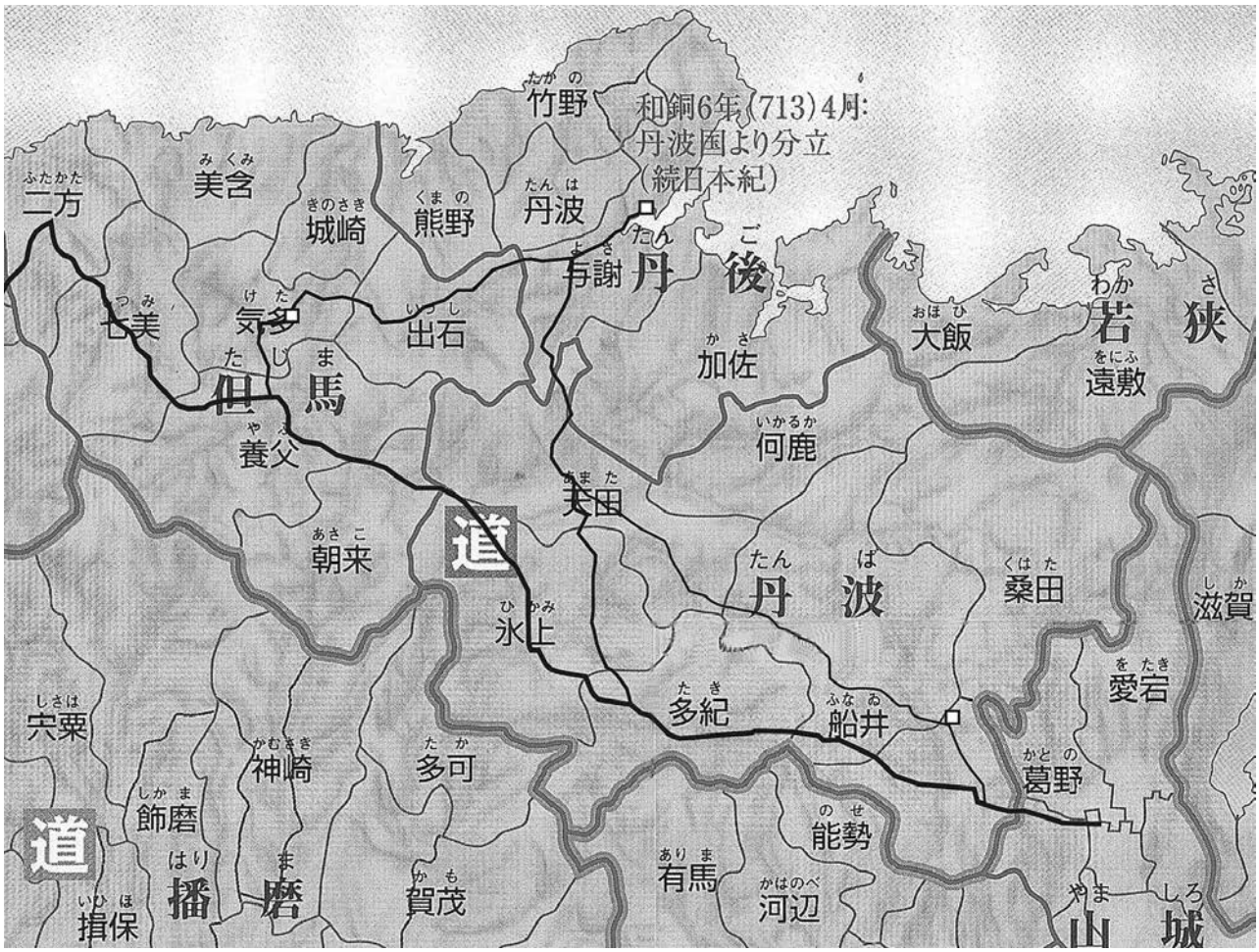
京丹後市史編さん委員会『図説 京丹後市の歴史～日本の「ものづくりのふるさと」京丹後市～』京丹後市役所　2012

菱田哲郎『古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会　2007

舞鶴市史編さん委員会『舞鶴市史 通史編(上)』舞鶴市役所　1993

宮津市史編さん委員会『宮津市史 通史編上巻』宮津市役所　2002

森　　正「丹後地域横穴墓の変質と終焉－律令期地域支配の一側面－」(『京都府埋蔵文化財論集』第３集　京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996



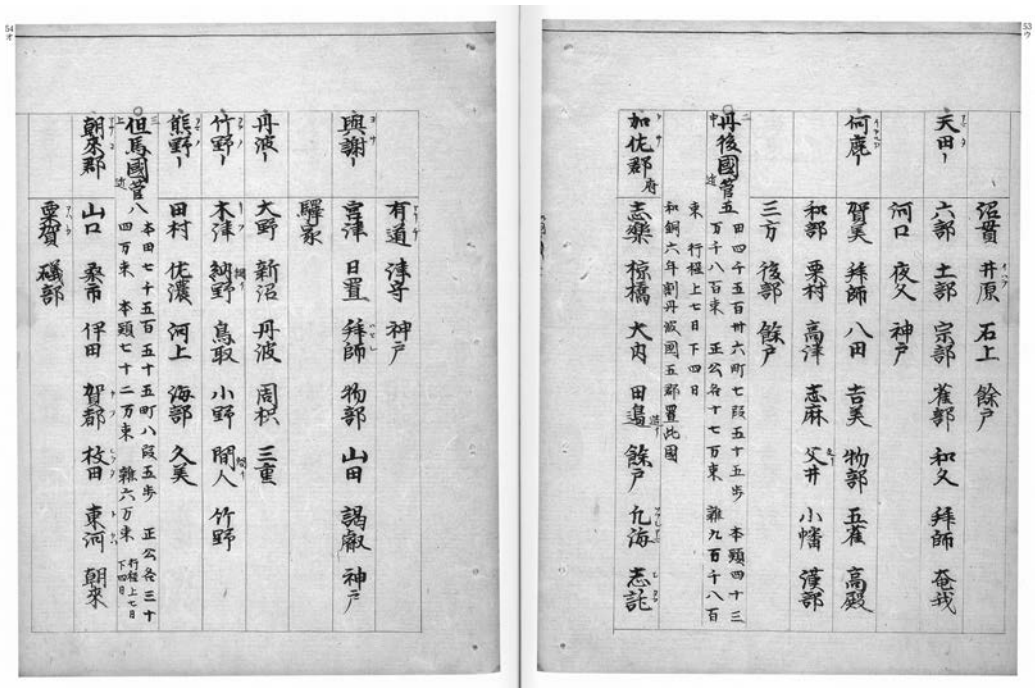


図１　丹後国の位置と『和名類聚抄』の記載

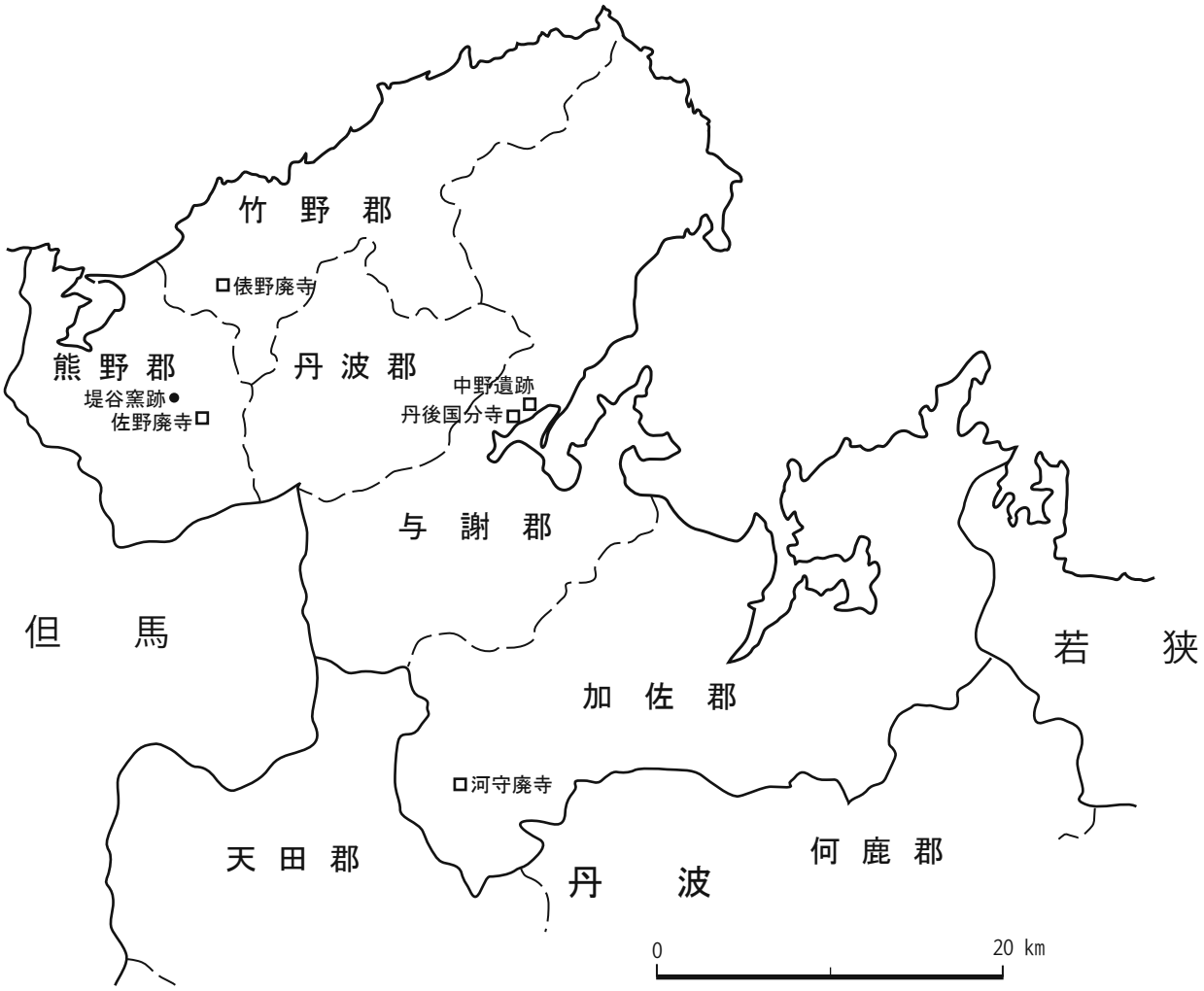


図２　丹後地域の古代寺院と関連遺跡

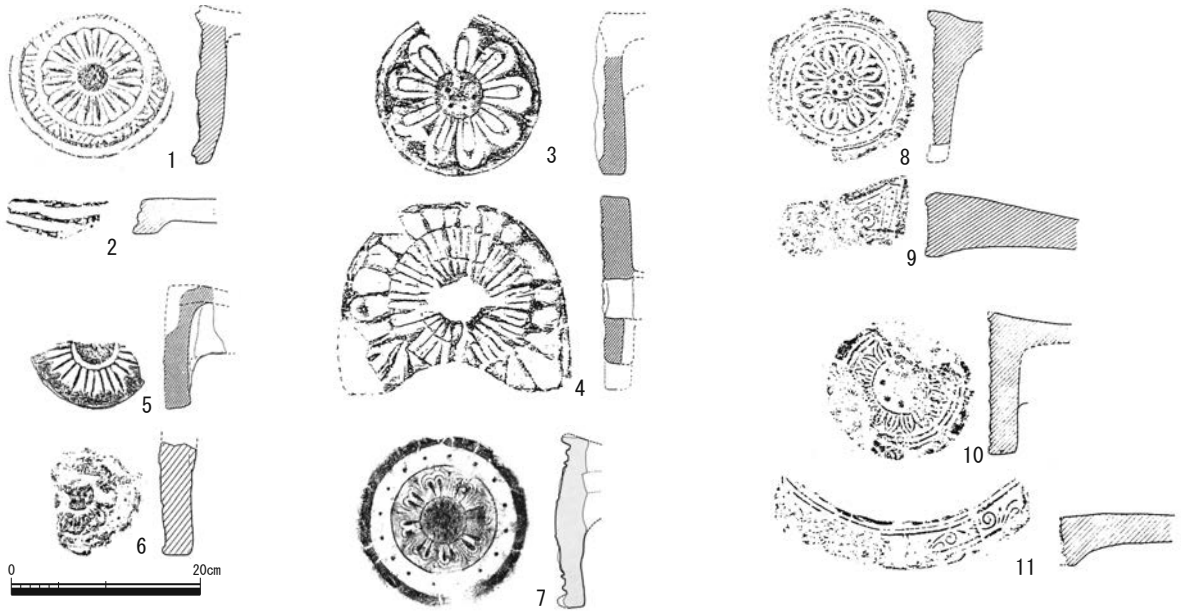


図３　丹後地域の古代瓦

（１・２：俵野廃寺，　３・４：堤谷窯跡，　５・６：佐野出土，
７：河守新町，　８・９：丹後国分寺，10・11：中野遺跡）

表１　丹後国荷札木簡一覧

No.	出土地	西暦年	国　名	郡（評）名	郷(里)名・その他地名	姓	貢納物
1	飛鳥池遺跡			…野(熊野?)評	佐野五十戸		
2	飛鳥池遺跡			加佐評	春口		
3	飛鳥京苑池遺構			□(加?) 佐評	椋椅部		
4	藤原宮跡	696	旦波国	加佐評	□(椋?)…		
5	藤原宮跡			与射評			大贄伊和…(イワシ?)
6	藤原宮跡			熊野評			大贄塩塗近代(コノシロ)
7	藤原宮跡			与射評			大贄
8	藤原宮跡			熊野評	私里		
9	藤原宮跡		旦波国	□(柯?) 佐□(評?)			
10	藤原宮跡		旦波国	竹野評	鳥取里		大贄布奈
11	藤原宮跡		旦波国	加…(加佐?)			
12	藤原京右京	709	丹□(波?) 国	加佐郡	白薬里		大贄久己利魚腊
13	平城宮跡		丹波国	□□(加佐?) 郡	川□(守?) 里		
14	平城宮跡		丹波国	竹野郡			
15	平城宮跡		丹波国	与□(謝) 郡			白米
16	平城宮跡		丹後国	□□(加佐?) 郡	□□(田辺?) 里		庸米
17	平城宮跡		(丹後国?)	…□(加佐?) 郡	志宅里	猪食部	白米
18	平城宮跡		丹後国	熊野郡	久美里		
19	平城京長屋王邸		丹後国				小堅魚
20	平城宮跡			(与謝郡)	速石郷		白米
21	平城宮跡		丹後国	熊野郡	私部郷高屋		大贄
22	平城宮造酒司跡		丹後国	与社郡	謁□(叡?) 郷□原里	土部・丹波直	米?
23	平城宮造酒司跡		丹後国	竹野郡	舟木郷	生部	
24	平城宮造酒司跡		丹後国	竹野郡	芋野郷	婇(采女) 部	赤舂米
25	平城宮造酒司跡		丹後国	熊野郡	田村郷	神人	米?
26	平城宮造酒司跡		丹後国	熊野郡	田村郷	刑部	米?
27	平城宮造酒司跡		丹後国	丹波郡	大野郷	石部	須米(酒米?)
28	平城宮造酒司跡		丹後国	加佐郡	□太郷		
29	平城京二条大路		丹後国	(与謝郡)	与謝(川?)		□□(鮮鮭?) 御贄・雌腹
30	平城京二条大路		丹後国	(与謝郡)	与謝川		鮮鮭御贄・雄腹
31	平城京二条大路		丹後国				□□□□(鮮鮭御贄) 雌腹
32	平城京二条大路		丹後国				塗漆櫃
33	平城宮跡			(与謝郡)	宮津郷		烏賊
34	平城宮跡		丹後国	熊野郡	田村郷		中男作物海藻
35	平城宮跡		丹後国	□(竹?熊?) 野郡		鴨君族	米?
36	平城宮跡		丹波国(ママ)	加佐郡	□□郷		
37	平城宮跡		丹後国	与謝郡	宮津郷		酒米
38	平城宮跡		丹後国	与社郡	日置郷	宇良婇(采女) 部	庸米
39	平城宮跡		丹後国	竹野郡	鳥取郷		
40	平城宮跡		丹後国	竹野郡	木津郷	紫守部	米?
41	平城宮跡		丹後国	竹野郡	間人郷	土師部	中男作物海藻
42	平城宮跡			丹波郡	丹波郷		
43	宮町遺跡（紫香楽宮跡）		丹後国	熊野郡	佐野		
44	宮町遺跡（紫香楽宮跡）		丹後国	加佐郡	田辺郷		赤舂米
45	宮町遺跡（紫香楽宮跡）		丹□□(後国?)	□□(丹波?) 郡	丹波郷		
46	長岡宮春宮坊			竹野郡	竹野郷		白米
47	長岡宮春宮坊			(竹野郡)	竹野郷		白米
48	長岡宮春宮坊			竹野郡	間人郷		白米

＊原則として２項目以上の記載のある木簡に限定した。
＊丹後国の可能性はあるが断定できないものは省いた。
＊□は読めない文字。…はその字数が限定できないもの。

平城宮造酒司推定地
丹後国丹波郡大野郷須〔酒カ〕米石部足五斗

藤原京右京七条一坊東北・東南坪出土
丹□〔波カ〕国加佐郡白薬里大贄久己利魚
腊一斗五升和銅二年四月

藤原宮跡北面中門地区出土
熊野評大贄塩塗近代百廿隻

図４　丹後からのものを運んだ木簡

図５　丹後・旧大宮町の横穴墓の分布

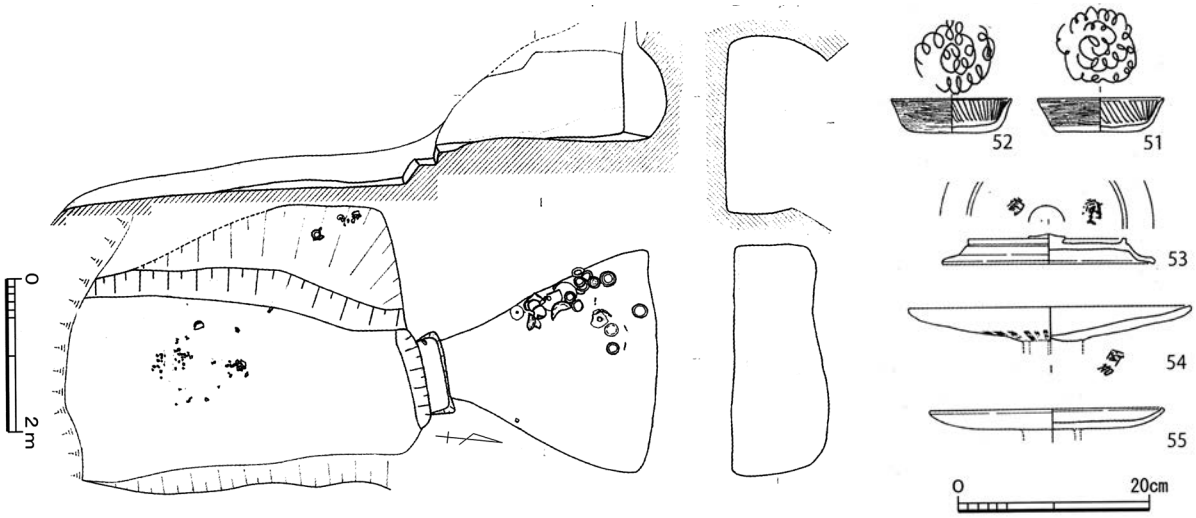


図６　大田鼻28号横穴墓とその出土土器

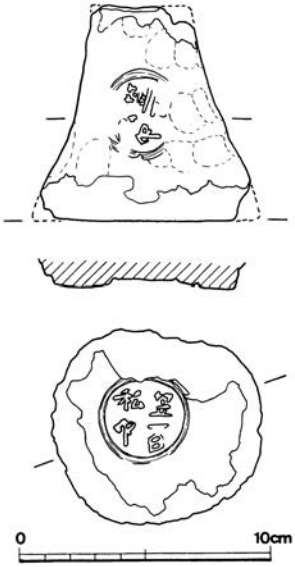


図７　浦入遺跡「笠百私印」

国名	件数
若狭	39
周防	23
紀伊	10
尾張	9
備前	9
讃岐	7
三河	5
越前	3
淡路	3
伊予	2
伊勢	1
備中	1

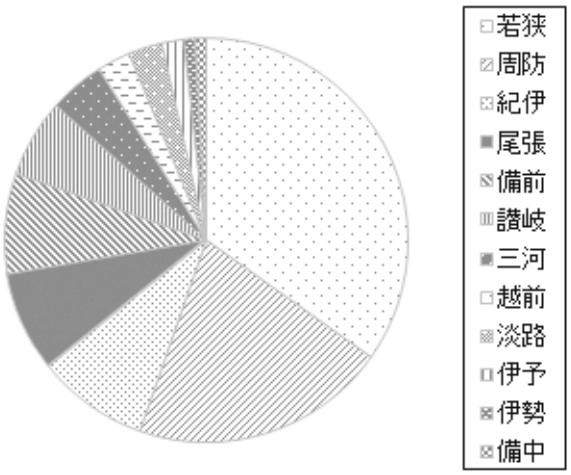
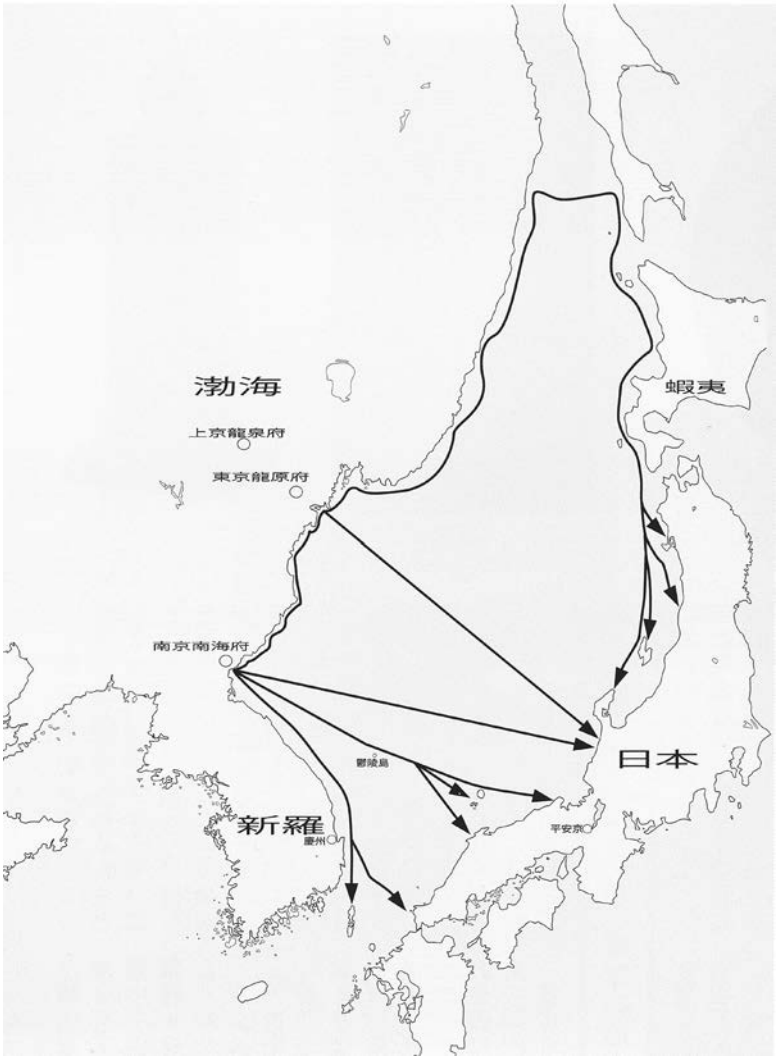


図８　平城京の塩木簡の国別数



西暦	和　暦	出　来　事
799	延暦 18	渤海使の来朝の年限（6年1貢）をなくしたことを諸国に伝える
800	延暦 19	蕃客の来朝に備え、破損した駅家を修理させる
804	延暦 23	渤海使が能登国に来着することが多いので、客院を作らせる
809	大同 4	渤海使到着
810	弘仁元	渤海使到着（越前国か）
814	弘仁 5	渤海使到着（出雲国）
817	弘仁 8	渤海使到着
819	弘仁 10	渤海使到着
821	弘仁 12	渤海使到着
823	弘仁 14	渤海使到着（加賀国）
825	天長 2	渤海使到着（隠岐国）
827	天長 4	渤海使到着（但馬国）
841	承和 8	渤海使到着（長門国）
848	嘉祥元	渤海使到着（能登国）
859	貞観元	渤海使到着（能登国）
861	貞観 3	渤海使到着（隠岐国）
863	貞観 5	細羅国人到着（丹後国）
871	貞観 13	渤海使到着（加賀国）
876	貞観 18	渤海使到着（出雲国）
882	元慶 6	渤海使到着（加賀国）
892	寛平 4	渤海使到着（出羽国）
894	寛平 6	渤海使到着（伯耆国）
908	延喜 8	渤海使到着（伯耆国）
919	延喜 19	渤海使到着（越前国）
926	延長 4	渤海国、契丹に攻められ滅ぶ
929	延長 7	東丹国使到着（丹後国）

図９　渤海との航路と渤海使関係年表

図10　横枕遺跡の遠景と出土陶磁器

京埋セミナー資料 No.135 － 415

丹後国府を探る
～宮津市府中地区の遺跡～

宮津市教育委員会
主　任　河森　一浩

１．はじめに

天橋立の北岸に広がる宮津市府中地区は、史跡・丹後国分寺跡や丹後国一宮である籠神社、平安時代の「印鑰社」が転化したと考えられる飯役社が点在し、古代の丹後国府の有力な所在地として注目を集めてきました(図１)。また、中世には一色氏の守護所が置かれたと考えられ、国宝・雪舟筆「天橋立図」(京都国立博物館蔵)といった絵画資料との対比から、中世都市のあり方が議論を呼んできました。本稿では、こうした丹後府中の遺跡群について、古代を中心として近年の調査成果を紹介し、丹後国府探求の可能性を考えます。

２．丹後国府をめぐる諸説

古代丹後国の国府の所在地は、『和名類聚抄』、『伊呂葉(色葉)字類抄』に「加佐郡」と記され、『拾芥抄』には「加佐郡」「与謝郡」が併記されることから、両郡を国府が移動した可能性が指摘されています。「加佐郡」における国府の所在地については、条里型の地割が残る河守遺跡周辺(福知山市大江町)が注目されていますが、その実態は十分に解明されていない状況です。本稿が対象とする「与謝郡」においても、考古学的な調査は不十分ですが、(１)男山、(２)府中という２つの候補地が提起されています(図２)。

（１）男山説

古代国府の構造は、平城京、平安京のような方形の都市プランと考えられ、大国・上国は一辺八町、中国以下はやや小さい規模が想定されてきました。与謝郡では、一辺五町程度の方形の都市プランが立地可能な平野が広がり、「町田」「丁後田」「鍵町」という国庁に関連する地名がみられることから、男山周辺が国府の所在地と推定されました。

また、国府には寺院の管理に当る国府附属寺院が存在し、国府に先行する白鳳期の郡家の付属寺院が起源と考えられています。男山東部の法王寺跡が候補地とされるほか、千原遺跡でも奈良時代から平安時代の瓦や須恵器、土師器などが出土しています。

（２）府中説

日本各地で発掘調査が進められると、古代国府の形態として、平城京、平安京のような

方形の都市プランを想定することは困難となり、「国庁」「館」「倉」などの施設が、道路に沿って東西または南北方向に点在する形態が一般的であることが判明しました。

このようにみると、男山周辺のように一辺五町程度の正方形の範囲を想定する必要はなくなり、国府との関連が強い丹後国分寺跡、一宮である籠神社、「印鑰社」が転化したと考えられる飯役社が東西に連なる宮津市府中地区が、改めて注目されました。一宮制度や印鑰社の成立が11世紀以降であることから、少なくとも平安時代後期には国府が存在した可能性が指摘されています。

３．丹後府中の遺跡

宮津市府中地区で行われた発掘調査を概観し、丹後国府が府中地区に所在した可能性を探ります。

（１）丹後国分寺跡（図３）

字国分に位置し、周辺に「本堂屋敷」「寺の下」「寺大門東」「西大門」など寺院に関連する地名がみられることから、古代の国分寺跡と考えられています。現在、地表に残される五重塔、金堂などの礎石（そせき）は、「丹後国分寺再興縁起（たんごこくぶんじさいこうえんぎ）」の指図との一致から建武（けんむ）年間の再建時の建物跡ですが、普賢寺（ふげんじ）跡（京田辺市）と同型式の軒丸瓦（のきまるがわら）が採集され、奈良時代に遡る可能性が高い遺跡です。特に、史跡地西側の発掘調査では、南北方向の溝や土塁（どるい）が検出され、奈良時代の須恵器、土師器が出土しています。また、７世紀の須恵器もみられ白鳳期から遺跡が形成されている点は注目されます。

（２）中野遺跡（図４）

奈良時代から中世にわたる多量の土師器、須恵器、黒色土器（こくしょくどき）、緑釉陶器（りょくゆうとうき）、灰釉陶器（かいゆうとうき）、貿易陶磁器、瓦などが出土しています。奈良時代の石敷（いしじき）遺構が検出され、「西寺（さいじ）」と書かれた墨書土器や円面硯（えんめんけん）・風字硯（ふうじけん）、平城宮系の軒平瓦（のきひらがわら）がみられます。また、籠神社には「法華寺附近畑より発掘　中野村妙立寺附近　大正二年」と注記された平城宮系の軒丸瓦が所蔵され、中野遺跡の南西に「法花堂（ほっけどう）」という地名がみられます。国分尼寺（こくぶんにじ）や国府に関連する遺跡と考えられています。さらに、平安時代以降にも多量の緑釉陶器、灰釉陶器、貿易陶磁器が出土し、丹後府中の中でも中心的な遺跡と評価できます。

（３）難波野遺跡（図５）

奈良時代から中世にわたる多量の土師器、須恵器、黒色土器、貿易陶磁器、瓦などが出土しています。特に、平安時代後期以降、掘立柱建物、礎石建物、井戸などの遺構が多く検出され、墨書土器や「寛治（かんじ）五年」（1091年）銘（めい）をもつ木簡（もっかん）の題箋軸（だいせんじく）、円面硯などがみられます。国府に関連する遺跡と考えられます。

（４）成相寺旧境内（図６）

府中地区北側の山麓に位置します。現在の境内地をさらに登った地点に、奈良時代から室町時代の伽藍が展開した旧境内地が広がります。寺伝「成相寺古記」には、慶雲元（704）年に創建され、応永７（1400）年に「嶺崩れて谷と成る」と記されています。旧境内地では15世紀に遺構や遺物が激減することから、現在の境内地に移動した可能性が高く、応永７（1400）年の「嶺崩れ」の記述を裏付けています。また、奈良時代後半期に創建されたことが考古学的に確認され、国分寺と関連して出現した可能性があります。平安時代後期には伽藍の整備が進められており、西国三十三所霊場の一つとして発展したと考えられます。

（５）大垣遺跡、一の宮遺跡

平安時代の土坑や、中世の鳥居柱根、溝、柱列などが検出されています。特に、鳥居柱根は平安時代後期の土坑を切る形で検出され、ＡＭＳ炭素14年代法による分析で1230＋9/－6年という年代が得られています。また、籠神社境内では「文治四年」（1188年）銘をもつ経筒が、真名井神社境内では「文治五年」（1189年）銘をもつ経塚が採集されています。

（６）丹後府中の古代遺跡と地割

これまで発掘調査が行われた府中地区の遺跡をみると、国府の存在を直接示す遺構は未検出ですが、奈良時代から瓦や墨書土器など官衙や寺院に関連する出土品がみられます。また、平安時代にも同様のあり方が認められ、府中地区が古代の与謝郡において重要な地域であったことがわかります。

ここで府中地区の地割をみると、真北（Ａ）、真北から西22°（Ｂ）、真北から西35°（Ｃ）と方位の異なる３つの地割がみられます（図１）。このうち、真北（Ａ）の地割は丹後国分寺跡で検出された奈良時代の溝状遺構・土塁と、真北から西22°（Ｂ）の地割は難波野遺跡などで検出された平安時代後期以降の建物と方位が一致します。府中地区では、平安時代中期（10Ｃ）の遺構が未検出で検討の余地を残しますが、奈良時代に施行された真北（Ａ）の地割（都市計画の基準線）が、平安時代後期に真北から西22°（Ｂ）の地割に再編され、中世都市に生まれ変わった可能性が浮かび上がります。

特に、真北（Ａ）方向の地割は、丹後国分寺跡の中軸線のほか、奈良時代の石敷遺構が検出され中野遺跡や、安国寺遺跡、小松遺跡周辺でもみられ、これらは古代国府や関連施設の存在を考える上で注目されます。

４．安国寺遺跡の調査

（１）遺跡の概要と調査の目的

安国寺遺跡は、府中地区のほぼ中央に位置します。東側は中野遺跡、西側は小松遺跡となりますが、本来、これらは連続する一体の遺跡である可能性があり、宮津市教育委員会では「丹後府中遺跡群」という全体の関係を意識して調査を進めています。

先述したとおり、安国寺遺跡周辺には、奈良時代まで遡る可能性がある真北方向の地割がみられ、古代の丹後国府に関連する遺構の検出が期待されます。また、周囲には雪舟「天橋立図」に描かれた「十刹安国寺」「諸山寶林寺」に関連する「安国寺」「法蓮寺」や、重要文化財・妙立寺厨子の墨書に登場する「ヨナイジ」、「飯役」「陣屋」「二日市」「金津」など歴史的な地名が多く（図７）、古代から中世の展開を視野に入れて当遺跡の全体像を把握することで、将来の遺跡の保存と活用に備えていきたいと考えています。

（２）発掘調査の成果

平成28年度は、６ヶ所（面積102㎡）の調査区を設定して発掘調査を実施しました（図７）。

第３調査区（Ｇ３）　平安時代後期から鎌倉時代に位置づけられる土坑が検出されました。第５調査区と同様に、中国産陶磁器や灰釉陶器が多く出土しています（写真１）。

第５調査区（Ｔ５）　直径80cmから１ｍを測る円形または隅丸方形の土坑（穴）が複数検出されました（写真１）。その規模や形態から、国府など古代官衙に関連する建物の柱跡である可能性があります。土師器、須恵器のほか、中国産陶磁器や灰釉陶器、瓦などが多く出土し、官衙的な性格がうかがえます。平安時代前期を主体とし、奈良時代まで遡る可能性があります。また、平安時代後期以降にも遺跡が形成されています。

第６調査区（Ｇ６）　遺構は未検出ですが、平安時代後期を主体とし、一部、平安時代前期に遡る土師器、須恵器や中国産陶磁器、灰釉陶器、瓦などが出土しました。

（３）まとめと展望

以上、平成28年度に実施した安国寺遺跡の発掘調査では、第３・５・６調査区の周辺で平安時代を主体とする遺構の拡がりを確認し、特に、第５調査区（Ｔ５）において平安時代前期を主体とした大規模な土坑が検出されました。これが柱跡であるならば、その規模から古代官衙に関連する建物であると考えられ、丹後国府の解明に向けて糸口となる可能性があります。

古代の国府は、国庁や倉、館、工房など、様々な施設から構成されることが明らかになっています。特に、中心となる国庁は北側に正殿、左右両側に脇殿が「コ」字形に配置されると考えられています。平成28年度の発掘調査は、トレンチ、グリットによる小規模なものであったため、遺構の性格は明確になっていません。今後は検出された土坑が柱穴であることを確定するとともに、その配置などを面的に把握して、遺跡の性格を明らかにする必要があります。

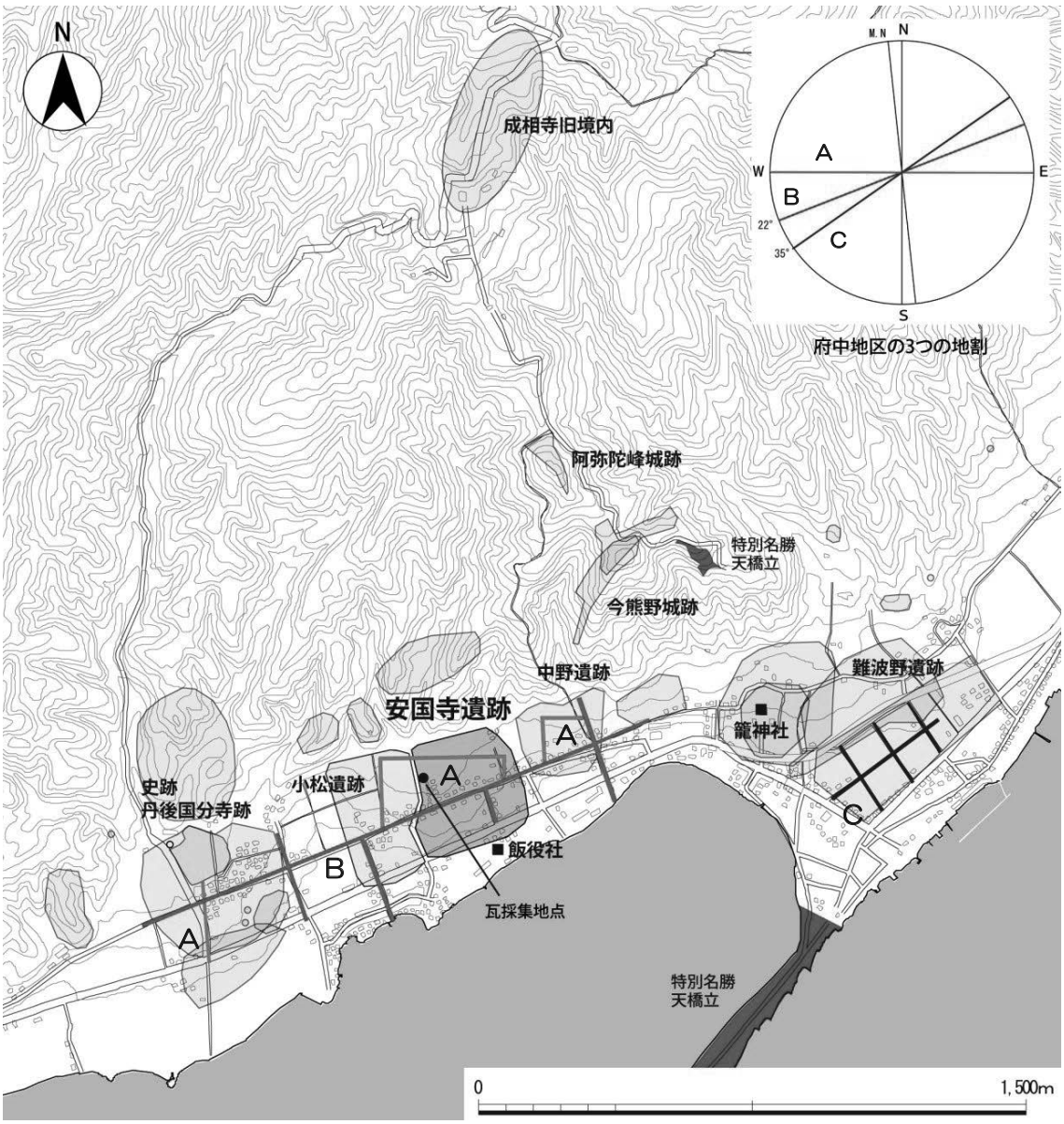


図１　宮津市府中地区の遺跡と地割

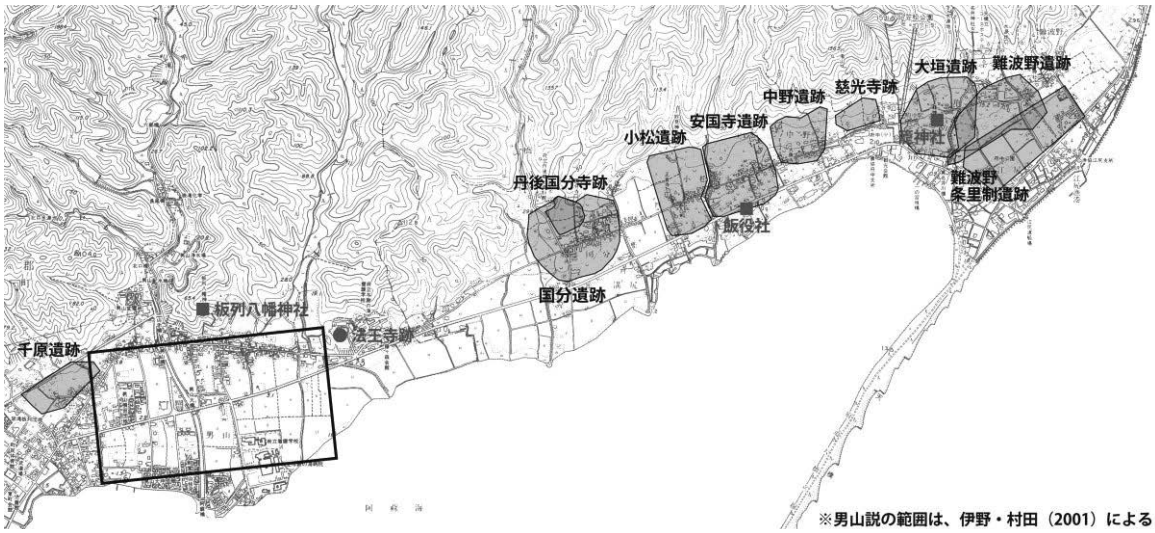


図２　丹後国府の「男山説」と「府中説」

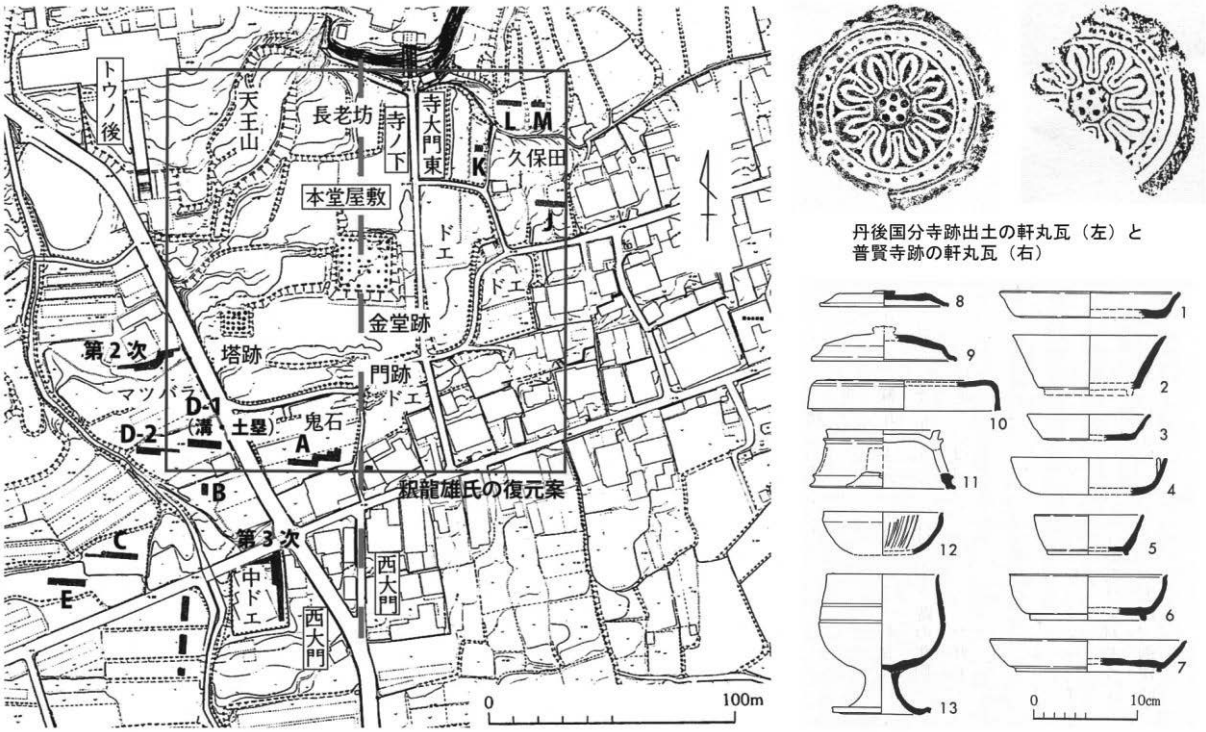


図３　丹後国分寺跡の調査地点と出土遺物

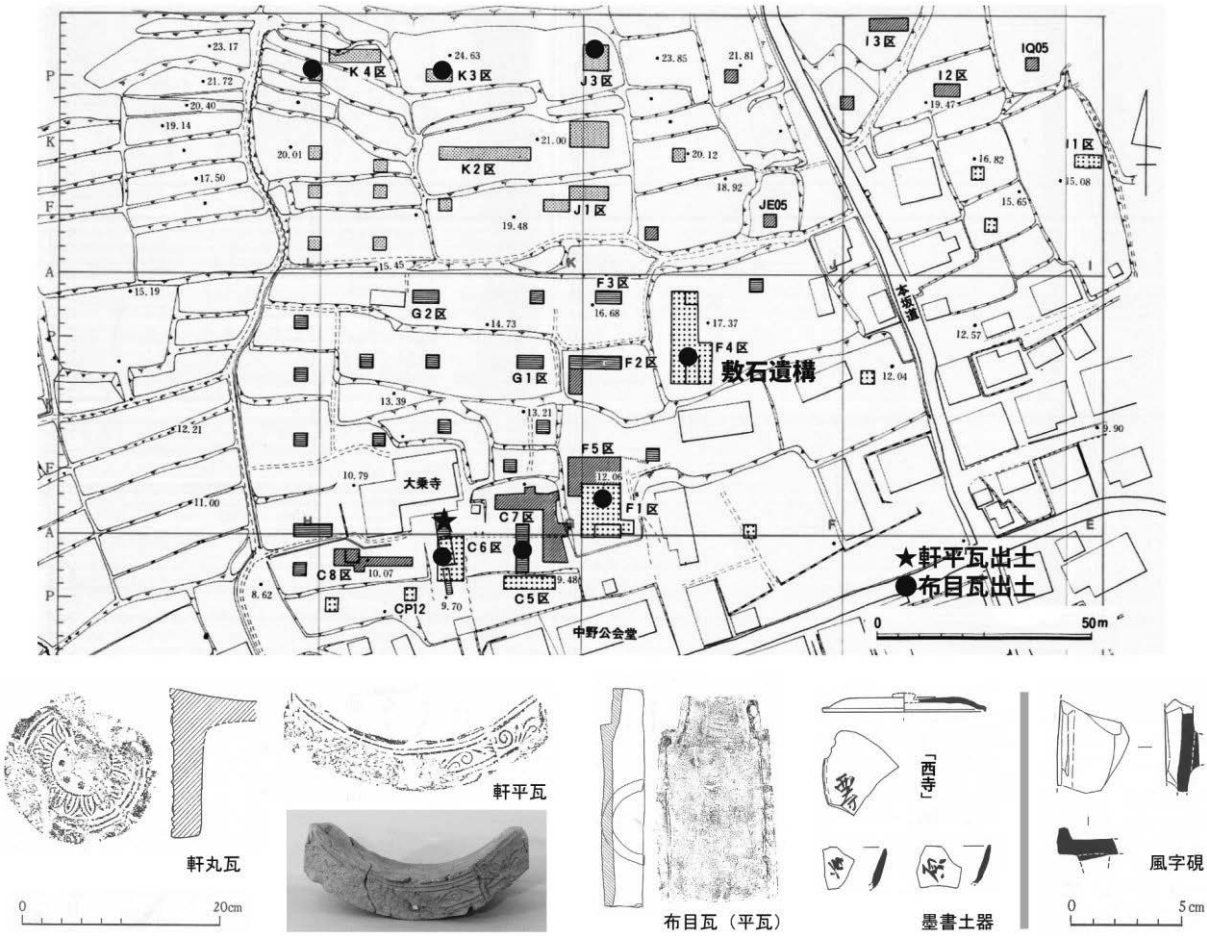


図４　中野遺跡の調査地点と出土遺物

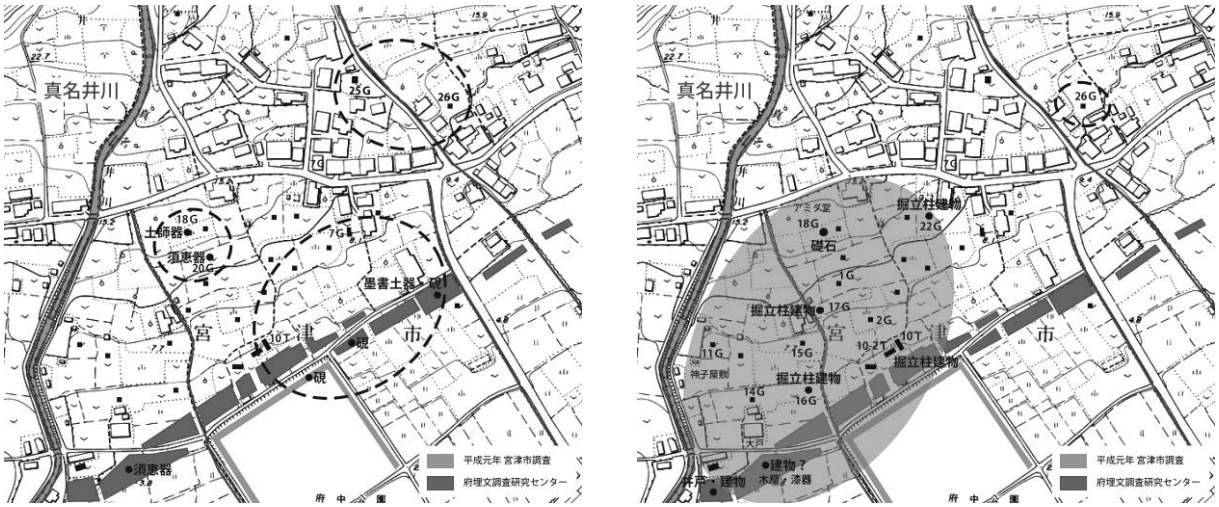


図５　難波野遺跡の変遷(左：奈良時代から平安時代前期、右：平安時代後期)

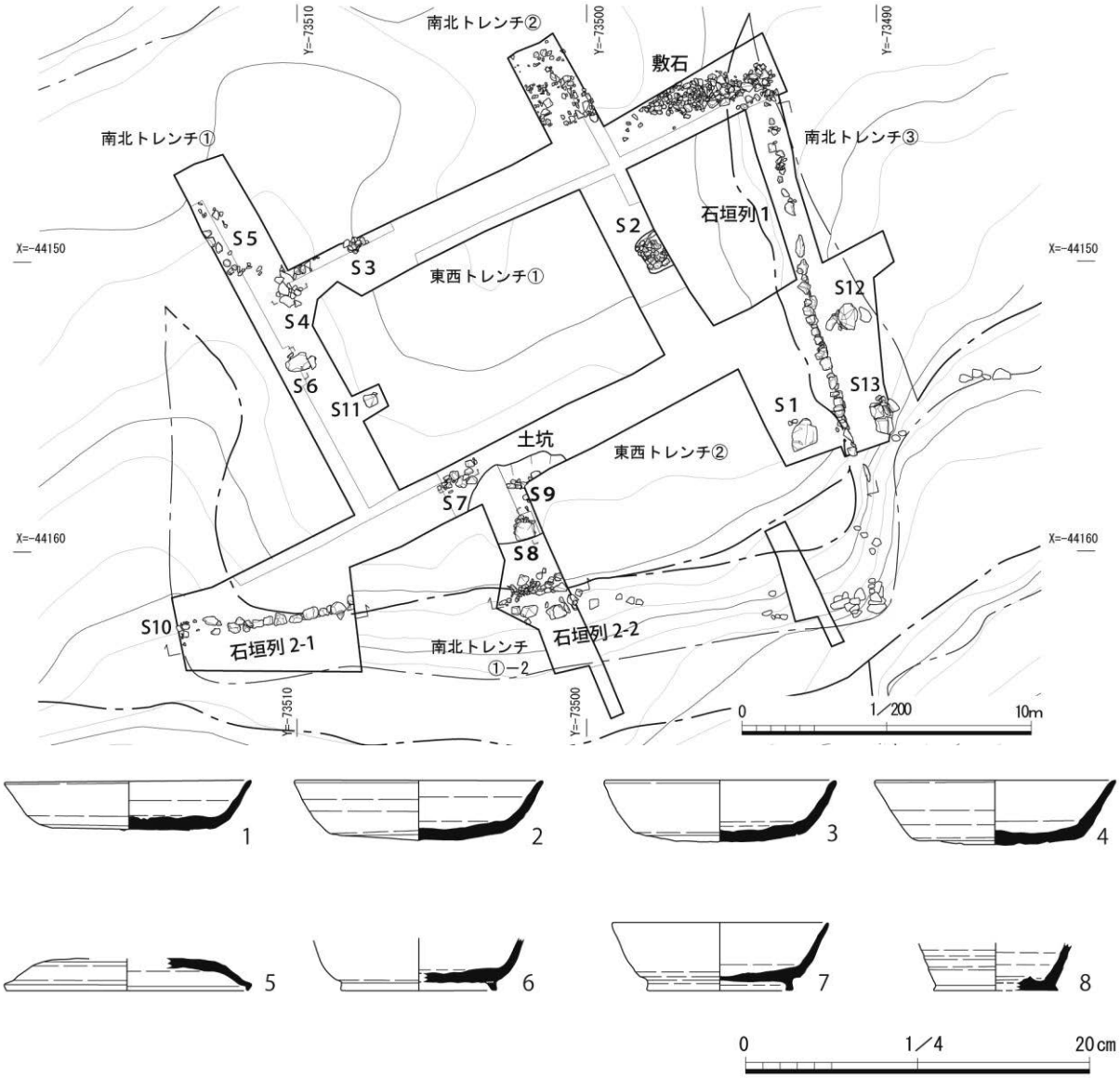


図６　成相寺旧境内第８トレンチの遺構と出土遺物

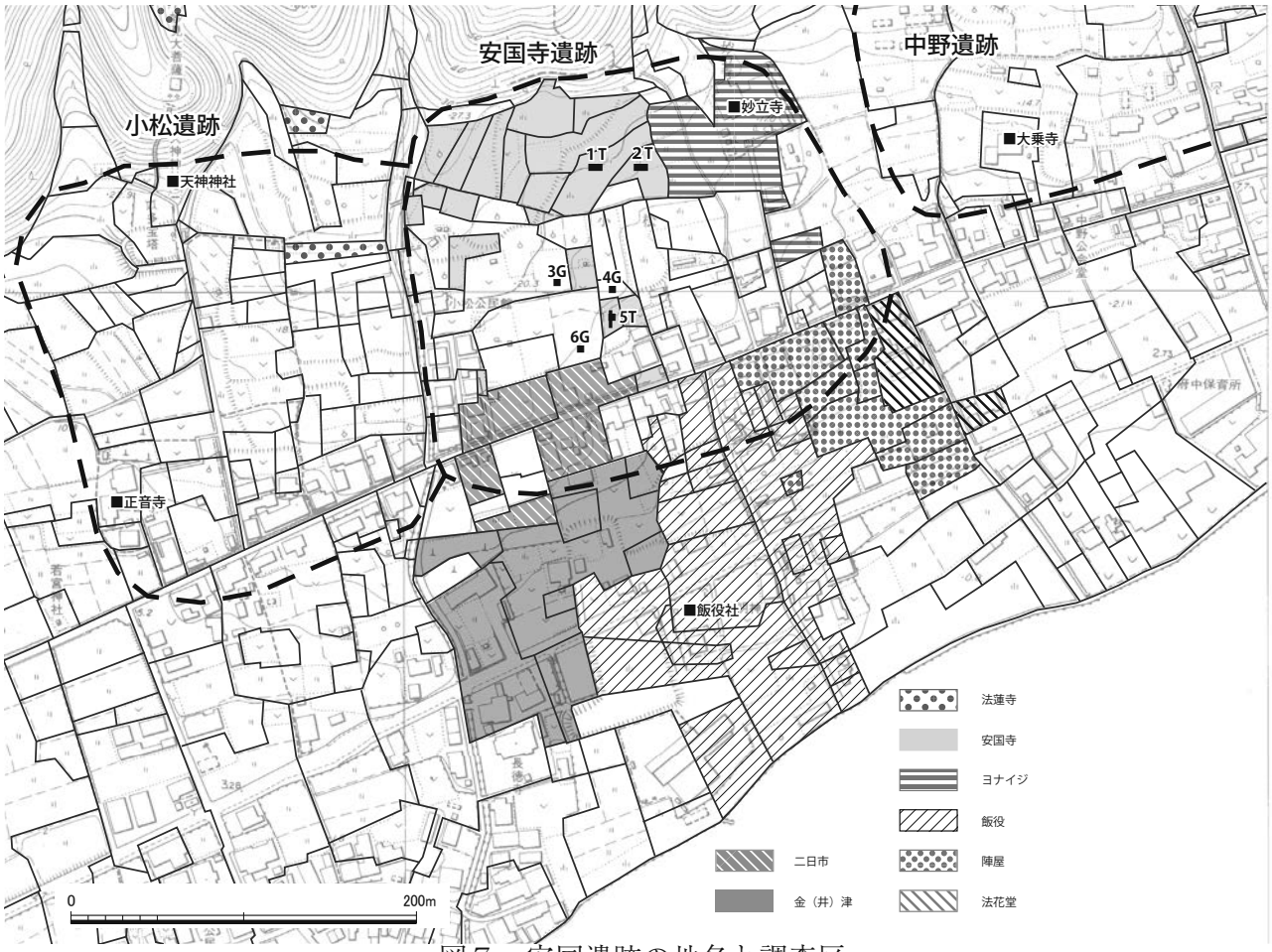


図７　安国遺跡の地名と調査区

写真１　安国寺遺跡の発掘調査(左上：第３調査区、右上･下：第５調査区)

京埋セミナー資料 No.135 － 416

丹後の先進技術
～塩・鉄・織物～

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
企画調整係長　筒井　崇史

１．はじめに

京都府はもともと山城国・丹波国・丹後国の３つの国から成り立っていることは、よく知られています。このうち、「丹波国」や「山城国（８世紀末まで「山背国」と表記）」が成立した年代ははっきりしていません。これに対して「丹後国」は、和銅６（713）年に、丹波国から加佐郡・与謝郡・丹波郡・竹野郡・熊野郡の５郡を分割して設置したことが『続日本紀』に記録されています。つまり、丹後国はもともと丹波国の一部だったのです。

丹後国が成立した８世紀初頭は、律令国家の整備が進み、中央官制や地方の行政区画の整備が行われました。丹後国もその中で成立したと考えられます。ここでは、古代（奈良・平安時代）の丹後国について、発掘調査の成果からみていきたいと思います。

２．発掘調査の事例

古代の丹後国で注目したいのは、生産に関わる遺跡が多いということです。特に人の生活に欠かすことのできない「塩づくり（以下、製塩）」や、国家が資源として優先的に確保を目的とした「鉄づくり（以下、製鉄）」などに関わった遺跡の調査が行われています（図１）。塩や鉄の生産に関わる技術にも触れながら、遺跡のようすを見ていきます。

（１）製塩遺跡

まず、製塩にかかわる遺跡としては、舞鶴市浦入遺跡をあげることができます。舞鶴湾に面した小規模な入り江状の浦入湾の海浜部の広い範囲で製塩作業を行っていました（図２）。おおよそ、飛鳥時代から平安時代の終わりごろまで、ほぼ連綿と製塩作業が行われていたことがわかりました。

当時の製塩は、海水を天日などによって濃縮したのち、中～小型の土器に移し替えて煮詰めて作っていました。浦入遺跡では、土器の中の海水を煮詰めていくための、薪などを燃やした痕跡が「焼土面」「石敷炉（いしじきろ）」などの遺構として見つかりました。

舞鶴湾周辺を含む若狭湾沿岸地域では、この中～小型土器（これを製塩土器と呼びます）を載せるための台（これを製塩土器支脚（しきゃく）と呼びます）が用いられている点に大きな特徴があ

ります。浦入遺跡の発掘調査では、これら製塩土器とその支脚の変遷が明らかにされ、若狭湾沿岸地域の製塩土器の年代を考える上で重要な成果となっています(図３)。

一方、浦入遺跡以外でも製塩作業を行っていたと考えられる遺跡が、京丹後市久美浜町のこくばら野遺跡や同市丹後町平(へい)遺跡などでも確認されています。しかし、浦入遺跡以外の遺跡ではいずれも操業規模も小さく、また操業期間も短いことから、浦入遺跡のあり方とは大きく異なります。この違いは浦入遺跡の性格を考える上で重要な視点です。こくばら野遺跡などでは、集落などで必要とする塩の生産をしたものと考えられます。

（２）製鉄遺跡

次に製鉄遺跡としては、京丹後市弥栄町の遠處(えんじょ)遺跡をはじめ、ニゴレ遺跡や黒部(くろべ)遺跡などが知られています。遠處遺跡では古墳時代から製鉄が行われていますが、奈良時代のものとしては製鉄炉３基、鍛冶(かじ)炉10基以上、炭窯(すみがま)10基以上、掘立柱建物８棟以上などが見つかっています(図４)。製鉄炉は原料である砂鉄と炭を高温で熱して不純物を取り除いて鉄をつくる際の大型の炉です。鍛冶炉は小型の鉄素材をつくったり、鎌(かま)や鍬(くわ)先などの道具をつくる際に使用する小型の炉です。また、製鉄や鍛冶などの作業には大量の炭が必要となるので、これらを生産するための炭窯も多数作られました。

製鉄には原料となる砂鉄と、これを溶かすための燃料となる炭、つまり木材が必要となります。遠處遺跡だけでなく、周辺にニゴレ遺跡や黒部遺跡など、複数の製鉄遺跡が分布することから、燃料となる木材の使用量が膨大となるため、１か所にとどまらず、木材を求めて近くを移動しながら継続して操業していたと考えられます。製鉄に関しては技術的難易度が高く、砂鉄や木材の確保、大規模な操業形態、操業場所の移動などを一、二の集落だけで行うのは困難と考えられ、丹後国府や中央政府が関与した可能性があります。

（３）織物

このほか、古代の丹後国では、正倉院に丹後国竹野郡から貢納された絁(あしぎぬ)が残されていることから、奈良時代には絹織物を生産していたことがわかっています。織物生産の実態を明らかにできるような発掘調査の成果はいまだありませんが、機織り機の部材と考えられる木製品が出土した例などもあります。また､平安時代の織物に関する遺物が与謝野町(旧岩滝町)定山(じょうやま)遺跡で出土しています(図７)。木の板に市松様の模様を刻み、布を染める際の版木(はんぎ)としたものと考えられます。

３．文字資料からみた古代丹後国

次に、発掘調査で出土した文字資料から、上述した生産遺跡や丹後国のようすについて、みていきましょう。

（1）丹後国内出土の資料から

まず浦入遺跡では、墨書土器がいくつか出土しています（図８）。注目されるのは「与社」と書かれた土器です。土器に墨書するのは、所属や用途を表すためです。「与社」は「ヨサ」と読み、現在の「与謝」のことをさすと考えられます。このことは浦入遺跡に与謝郡との関連があった可能性を示しています。「与謝郡」が丹後国府の所在地と推定されていることもふまえれば、両者の間の関連が何を示しているのか、気になるところです。

このほかにも「塩」と書かれたと推定される墨書土器もあり、当地が製塩と大きくかかわっていたことを文字資料として示していると言えそうです。

また、「笠百私印」と押印された製塩土器支脚が出土しており（図９）、地元の豪族（ごうぞく）と考えられる「笠」氏が、浦入遺跡での製塩作業に関わったことを示す資料と考えられます。

一方、遠處遺跡では木簡が出土しています（図10）。文字を赤外線カメラなどで判読すると、田租（でんそ）（口分田（くぶんでん）の収穫量の３％程度の稲を税として納めたもの）と「真成（まなり）」という人物にについて書かれています。田租は国府や郡家の正倉（しょうそう）に備蓄され、災害などが起きると救済のために使用されるものでした。この田租に関わる木簡の出土は、1つの可能性として、遠處遺跡での鉄生産に丹後国府などの公的な機関の関与をうかがわせるものです。

（2）藤原宮・平城宮出土木簡から

奈良文化財研究所の木簡データベースで検索すると、丹後国、あるいは丹後国内の郡郷などの地名が書かれた木簡が約100点あることがわかります。藤原宮（ふじわらきゅう）（697～710年）で出土したものには「丹波国加佐郡」と書かれたものもあり、713年以前には、丹後国が丹波国の一部であったことが当時の文字資料によっても確認できます。

さて、これら木簡の多くは丹後国から都へ税として納められたものに付けられた荷札木簡と考えられています。しかし、荷札木簡の品目には「塩」や「鉄」と書かれたものはなく、丹後国から直接「塩」や「鉄」が税として納められていなかったようです。この点は10世紀に成立した『延喜式（えんぎしき）』という書物でも、丹後国からの税目に「塩」や「鉄」を確認することができないこととも一致します。ただし、『延喜式』によれば、織物については各種のものが挙げられており、先に述べた正倉院の絁もこのころ納められた税の一部だったかもしれません。

以上のように、丹後国内で大量に生産されていたと考えられる「塩」や「鉄」は税として納められていなかったことになります。

塩は人が生きていく上で必要なものなので、記録には現れていなくても一般に流通していた可能性があります。しかし、大量に生産された塩は税として納められる以外にどこへ行ったのでしょうか。ここで注目されるのは、隣国の若狭国です。若狭国は『延喜式』に

よれば、様々な海産物とともに、塩を納める国とされ、実際に藤原宮や平城宮(710～784年)などでは、若狭国から塩が貢納されたことが木簡からうかがうことができます。丹後国から塩を税として納めていないことから、近接する浦入遺跡で生産された塩が若狭国の塩として納められていた可能性もさまざまな可能性の一つとして考えることができそうです。

次に鉄製品について考えてみたいと思います。鉄製品は平城宮で働く官人たちに、年２回、高級貴族であれば鍬を80～140個、下級官人であれば鍬を５～15個というように位に応じて支給されていました。鍬は税として納められていたことが出土木簡から分かっています。また、製品ではなく単に鉄として納められている例もあります。この場合、平城宮近辺で製品化された可能性もあります。

しかし、丹後国から税として鉄が納められていないとすれば、遠處遺跡などで生産された鉄は、どこへ行ったのでしょうか。遺跡の概要の項でも述べたように、丹後国府などの関与も想像されることから、できあがった鉄を丹後国内で消費しただけではなく、他の地域にも運んだ可能性があると考えられます。残念ながら、その行き先は今のところ明らかではありません。しかし、どこかの場所に運ばれ、農具や武器などの製品に加工されていた可能性は十分にあると考えられます。丹後国で生産された鉄の行方は、まだまだ謎に包まれたままです。

４．まとめ

本報告では、古代の丹後国の代表的な生産遺跡を取り上げ、それぞれの遺跡から出土した文字資料や、都城で出土した木簡などを通じて検討しました。

まず、製塩遺跡については、浦入遺跡の突出した規模と、ここで生産された塩が若狭国の塩として納められていた可能性を考えてみました。一方、製鉄遺跡では高度な技術を必要としますが、大規模な生産が行われていました。ここで生産された鉄が、どこか他の地域へ持って行かれて加工された可能性を指摘しました。

このように丹後国では、塩や鉄などの大規模な生産遺跡があるにもかかわらず、そこで生産されたものを税として納めていないという特色がみられました。これらのすべてが丹後国内で消費されたとは考えにくいことから、生産物を周辺の国々へ供給していた可能性を考えてみました。こうした国と国の間で大量の生産物を移動させるとなると、やはり国どうしの連携、あるいは中央政府の関与なしにはできないのではないかと考えます。こうした国や中央政府が関与した可能性は出土した文字資料からも追認できそうです。

以上、わずかな資料からではありますが、古代丹後国の生産遺跡をめぐる遺跡の背景について検討しました。

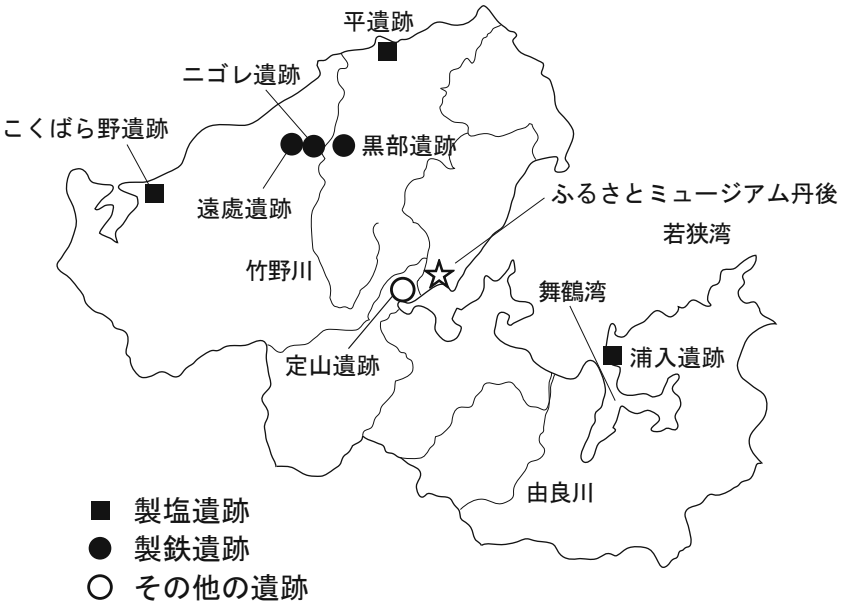


図１　今回取り上げる遺跡の分布図

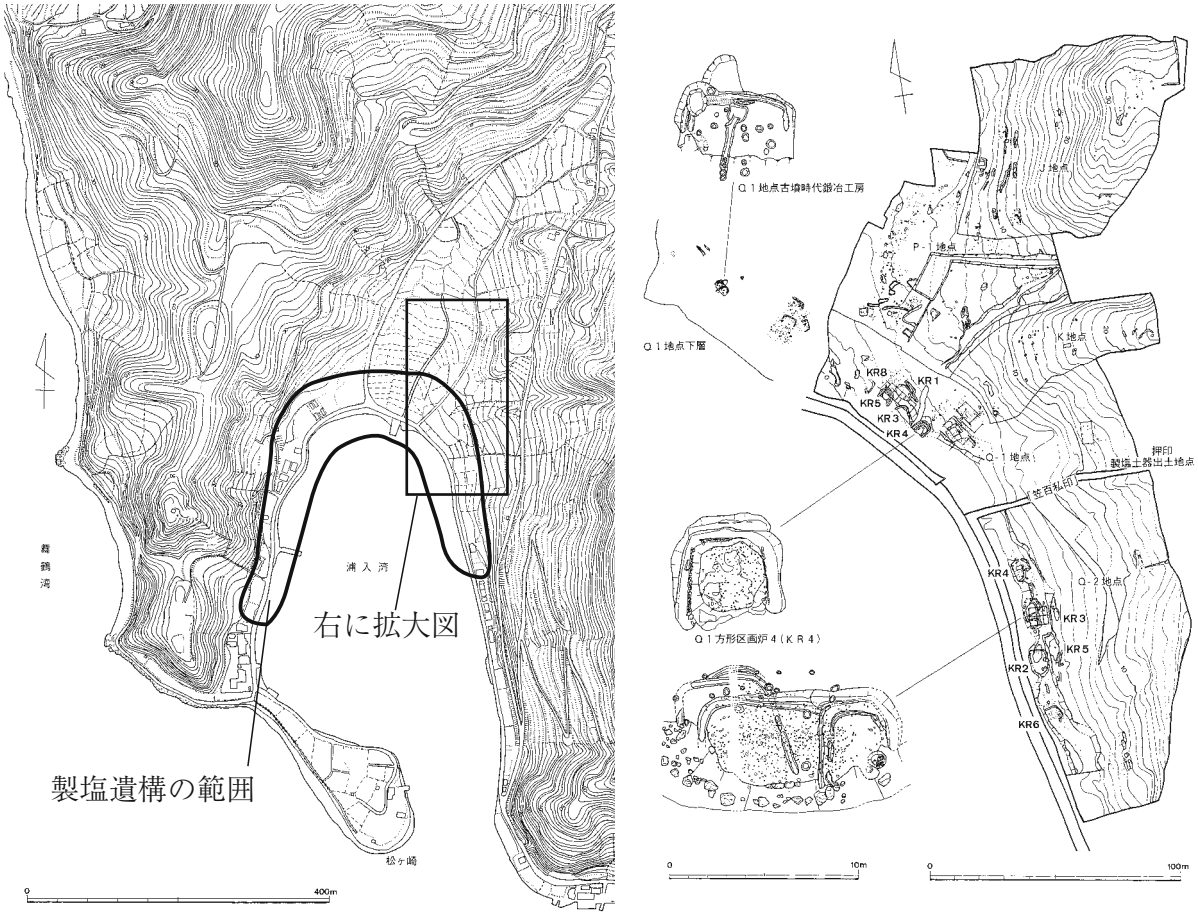


図２　浦入湾(左)と製塩遺構(右)

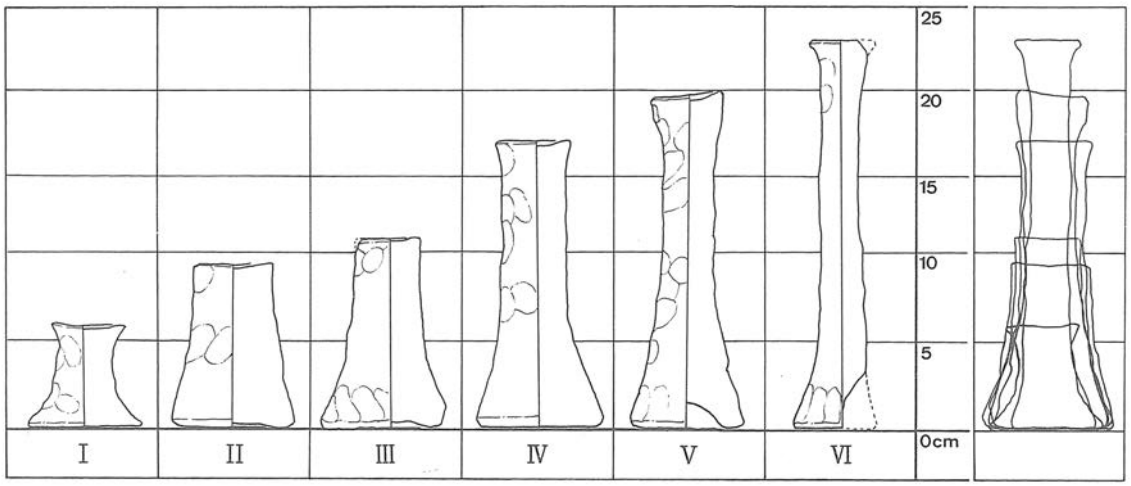


図３　浦入遺跡出土製塩土器支脚の変遷

図４　遠處遺跡茗荷谷（みょうがだに）地区と同Ａ地点遺構配置図

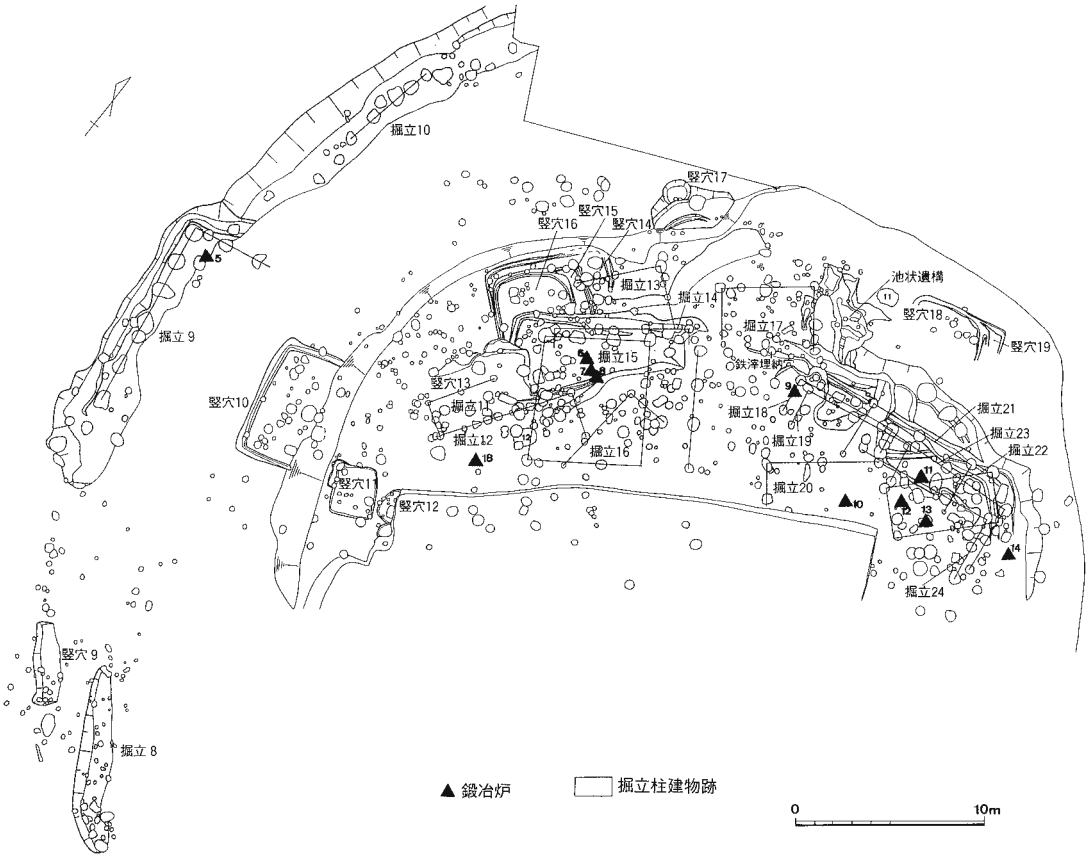


図５　遠處遺跡茗荷谷Ｂ地点遺構配置図

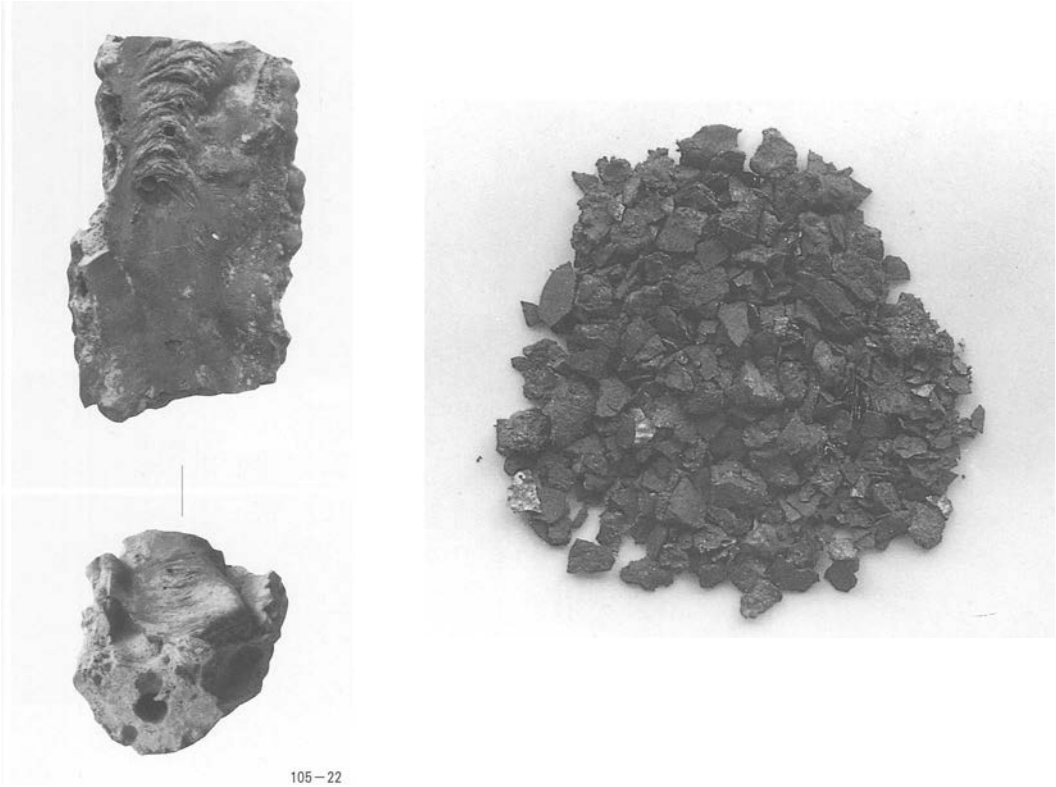


図６　遠處遺跡出土の炉底滓（左）と鍛造剝片（右）

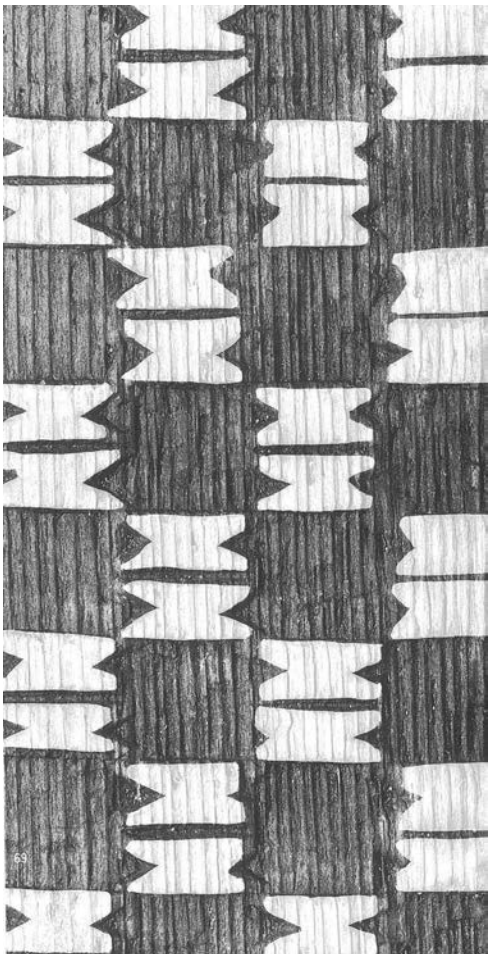


図７　定山遺跡出土の版木
（染め方がわかるように遺物写真を加工）

図９　浦入遺跡出土
「笠百私印」製塩土器支脚

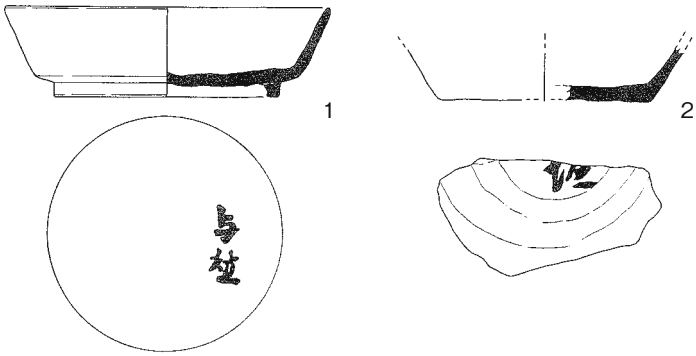


図８　浦入遺跡出土墨書土器
１：「与社」　２：「塩」か

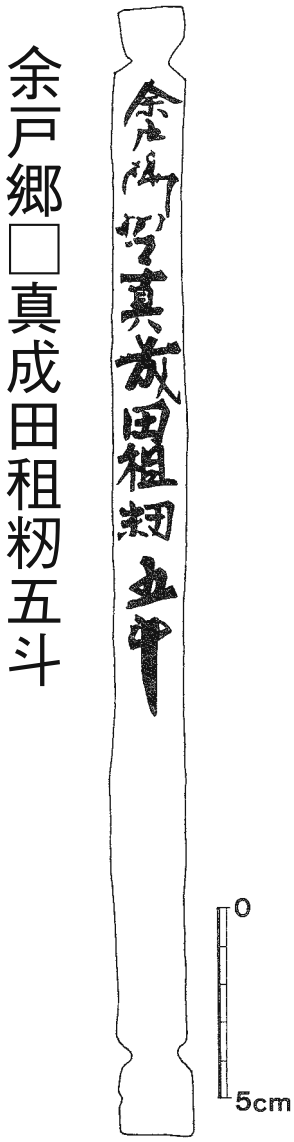


図10　遠處遺跡出土木簡

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、成果展などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

http://www.kyotofu-maibun.or.jp
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒 617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内 40 番の 3
Tel （075） 933-3877（代表）　Fax （075） 922-1189